
□ 作曲

石 塚 潤 一

2014年12月、インターネットサイト「現代音楽イベントカレンダー」が有志の力により立ち上げられ、首都圏の現代音楽関連イベントについての情報がここに集められることとなった。このサイトに登録された2015年のイベント総数は実に412。最繁の10月には47のイベントが轟めいている。この全てが邦人新作に関わる演奏会ではないとはいえ、首都圏という限定を考えれば驚くべき数といえよう。近年、とにかく演奏会数は増加した。注目すべき新作の初演が、同日に二か所三か所と重なることも珍しくない。

本稿を担当するに当たり、こうしたここ20年ほどの現代音楽を取り巻く環境の変化と、その要因とを明示しておくことは無駄ではないだろう。その一番大きな理由は、やはりインターネットである。1万人以上を相手にする大規模な情報発信は、まだまだマスコミ媒体に及ぶべくもないが、インターネットでは、音楽愛好家の一部を対象とした濃密な情報発信を行うことができる。デジタル技術により、チラシデザインを自ら行うなど、演奏会の制作経費を圧縮することが可能となり、加えて首都圏では、客席数200名以下のホール、客席数50程度のライブ会場といった、小規模な演奏会場が整備され一般化した。これらにより、演奏会を行うに当たっての「参入障壁」が下がり、作曲家の卵たる学生たちが学外で気軽に作品を発表する機運が生まれ、中堅以上の作曲家が演奏家との密な協働により先鋭的な作品を発表する場が担保された。首都圏に限っても年間412のイベントが開催されるに至った理由がここにある。もちろん、玉石混淆、石の方が多い状況であることは否めないが、日本国内の、特に中堅作曲家の充実はこの混淆の中にあり、海外での受賞やオーケストラ新曲初演といった、華々しい話題ばかりを追いかけても見えてはこない。

さらに、日本の創作を語るとき、湯浅譲二、松平頼暁という80代半ばの作曲家が、自らが積み上げた語法の先に新しい地平を拓く創作を続けていることを特筆すべきだろう。湯浅は音楽を音響エネルギーの推移と捉えた作風で知られ、15年も《プロジェクト—混声のための》(2月15日:日本現代音楽協会 西川竜太の啓く現代合唱の世界)、《ジョルジオ・デ・キリコ》(3月20日:低音デュオ第7回演奏会)、《ヴァイヴ・ローカス》(12月17日:會田瑞樹パーカッションリサイタル2015)などの新作を発表。特に、バリトン歌手とチューバのための《ジョルジオ・デ・キリコ》での楽器用法は極めて独創的で、湯浅が、自らのいう未聴感を追求し続けていることを示している。松平頼暁は、ピッチ・インターバル技法という独自の音程組織を運用する際の突き抜けたアイデアで知られ、《A person has let the "Kelly" out of the bottle》(2月15日:上記)、《Trio for One Player》(11月27、28日:工藤あかね「Secret Room Vol.2-布と箱」)などを発表。前者では、自動翻訳の繰り返しで作られたほとんど意味のないテキストに極めて抽象的な音楽を作曲し、これらを「感情を込めて」歌うよう指示する逆説が際立ち、後者では、歌・ギター演奏・ダンスという独立した3パートを、一人の演奏家に同時にパフォーマンスさせる。

こうした大家の活躍もあり、日本国内の作曲は一応の活況を呈している。ここからは邦人新作の発表という点において注目に値する演奏会を、日付順に回顧してゆく。1月14日、東京現音計画 #04。五人の演奏家によって結成された東京現音計画の公演は、公演ごとに責任者を選び、その責任によって選曲を行うコンセプトが特徴的。この日の責任者は団員のサクソ奏者:大石将紀で、池田拓実への委嘱新作を初演。8月11日の東京現音計画 #05では、ケルン在住の作曲家:稲森安太己に責任者を依頼し、氏への委嘱新作とケルン近辺の最新作を紹介。1月15日、23日、東京都交響楽団 日本管弦楽の名曲とその源流19、20。別宮貞雄、一柳慧とプロデューサーを変えながら、毎年2公演、10年に亘って続いてきたこのシリーズの幕引き。川島素晴と一柳の新作を初演。2月15日、西川竜太の啓く現代合唱の世界。西川竜太は、日本の現代音楽界において質・量ともにもっとも豊かな委嘱活動を行う音楽家であり、このコンサートにおいては、上記の湯浅、松平の新作に加え、横島浩、福土則夫の新作を初演。15年の西川は、他に大熊夏織、原田敬子、伊左治直、森田泰之進、鈴木純明、鈴木治行、川上統、権代敦彦などの新作を初演する活躍ぶり。アマチュア合唱団の委嘱でも、それゆえの手加減を作曲家に求めない徹底した姿勢が印象に残る。3月22日、大矢素子オンド・マルトノリサイタルvol.4。フランスアカデミズムの中で育まれた電子楽器で、より前衛的な作曲家の作品へと取り組む。近藤謙、鈴木治行の新作を初演。6月23日、NHK交響楽団 Music Tomorrow。尾高賞受賞曲再演の場でもある演奏会で、今回は、受賞作曲家、委嘱作曲家がともに藤倉大だったため半個展の趣。7月5日、作曲家グループPath2015コンサート。日本の中堅世代の充実を示す同人による作品展。イギリスよりトロンボーン奏者:バリー・ウェブを招聘し、木下正道、渡辺俊哉、徳永崇、星谷丈生など。ベルト・アロイス・ツインマーマンの《若き詩人のためのレクイエム》日本初演(8月23日)など、例年以上に充実した公演が並んだサントリー芸術財団サマーフェスティバル。創作面では、国際委嘱シリーズ(8月27日)と芥川作曲賞(同31日)とが印象に残った。委嘱作曲家:ハインツ・ホリガーは、新作で特異な音色を丁寧に紡ぎ、芥川作曲賞では、浅賀小夜子、辻田純美、坂東祐大が賞を競い、坂東が受賞した。酒井健治への委嘱新作も。10月27日、作曲家の個展 原田敬子。自身の管弦楽作品公演を行うに当たって、桐朋学園のオーケストラを主軸とした異例の公演。これは、2日ないし3日のリハーサルのみ本番という、既成のオーケストラ公演システムに対する問題提起、ないしは抵抗とも取れる。11月2日、東京都交響楽団第797回定期。細川俊夫の新作を初演。遷厶を迎えた細川については、同21日、28日に室内楽演奏会が計4公演開催され、望月京をはじめ4人の作曲家が祝賀曲を書き下した。同17日、オーケストラ・プロジェクト。鈴木純明、渡辺俊哉、中川俊郎による、それぞれ傾向の異なった新作の水準が高く、このシリーズとしては出色の公演。12月4日 川上統個展。近年、音色に独自性を獲得し進境著しい中堅の個展。作品の性格を細部まで噛み砕いた多井智紀によるディレクションも特筆に値しよう。

なお、2015年には、1月5日に唯晃震一、同29日に真鍋理一郎、9月26日に助川敏弥が彼岸の人となった。